

Title	英語発音指導の現状と課題
Author(s)	チェンバレン, 暁子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.3, 2015.3 :12-14
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5288
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

英語発音指導の現状と課題

チェンバレン 暁子

国際社会のグローバル化に伴い、1980年代末より当時の文部省が従来の文法、訳読中心の英語教育から「コミュニケーション重視の教育」を推進して久しい。以来、中学校の英語授業ではオーラルコミュニケーションを重視した授業が著しく増加し（手島、2011）また、2011年4月より、小学校5年から「外国語活動」（実質的には外国語とは英語を指す）が実施され、更には2013年4月からは「英語の授業は英語で行うことを基本とする」という方針が高校の学習指導要領に盛り込まれ、時代の要請と共に一層コミュニケーションを重視した英語教育へとシフトしてきている。このような潮流の中で、果たして日本人の英語コミュニケーション能力は向上していると言えるのだろうか。

2011年度から導入された小学校における「外国語活動」の導入後、中学教員に行われた意識調査¹⁾では、8割近くの教員が「成果や変容がみられた」と答えている。更には、英語の「聴く力の向上」がみられたと答えた教員は約65%にのぼる。1987年度より始まった外国語指導助手（ALT）の導入や、中学校での英語の授業時間の増加、大学センター試験リスニング試験の導入により以前よりも英語のリスニングが重視されたことなどから、英語リスニングを得意とする学生が増えたことは、筆者も教育現場において実感する。

コミュニケーションに於いては、リスニングだけでなく、英語の発話音声も非常に重要な役割を果たすが、果たしてリスニング同様に、英語の音声教育は教育現場において充分に行われてきているのだろうか。筆者は、大学1年の英語基礎科目を数多く教える中で、大学入学前に英語音声の学習を受けていないと思われる学生の多さを日々実感する。第二言語（L2）の学習は第一言語（L1）である母語の影響を大きく受けるが、日本語と英語の音声を比較すると、日本語は5つの母音が中

心となる音声言語であるのに比べ、英語においては子音がより重要な役割を果たす。日本語は「モーラ拍リズム」「語ピッチ言語」である一方、英語は「強勢拍リズム」「イントネーション言語」である（田中・山西、2011）。特に日本語には5つの母音と15個の子音しかないのに比べ、標準アメリカ英語は12個の母音と24個の子音を有する²⁾。英語には日本語にない音素が多数存在する上、英語の特徴として「子音と母音の音素が化学変化を起こすかのように連なりながら連音や同化を繰り返し、英語特有の音声やリズムを生み出す」（寺島、2000）これらのことから、英語の音声指導はコミュニケーションを重視する英語教育においては非常に重要であるといえる。英語の音声に関する規則の基本知識に基づき、自らの意見や意思を相手にわかりやすく伝えることのできる能力を習得することは、英語コミュニケーション能力の上達に大きく寄与すると考える。では、大学入学前に学生はどの程度の英語発音指導を受けてきているのだろうか。

・調査

大学入学前にどのくらいの学生が音声指導を受けてきたかを調査した。

調査対象は、埼玉県内の私大の必修英語を受講した一年生18名。入学時のTOEICのスコアは450～550点である。

設問1：大学入学以前に英語の発音指導を受けたことがありますか。

- ① ある 39% ② ない 61%

設問2：ALTの指導を受けたことがありますか。

- ① ある 72% ② ない 28%

設問3：問1で①の「ある」と答えた人は、以下の誰からですか。

- ① 日本人の教員 56% ② ALT 22%

- ③ ①と②の両方 22%

設問4：あなたは英語の発音に自信がありますか。

- ①自信がある 0% ②少し自信がある 5%
③どちらともいえない17% ④自信がない 78%

設問5：大学で英語の発音指導を受けたいと思いますか。

- ①とても受けたい 22% ②受けたい 72%
③どちらでもない 0% ④受けたくない 6%

・結果

上記のアンケート結果から、設問1で約6割の学生が大学入学までに英語発音指導を受けて来なかったと回答しており、この結果は有本（2005）や太田（2012）のアンケート調査の結果とほぼ一致している。有本（2005）は、夏の教員研修でアンケート調査を行ったところ、約3割の英語教員が「全く発音指導をしていない」と回答し、また、高校検定教科書のアンケートにおいても発音の頁は「あまり利用しない」、または「不要」という回答が多く寄せられたと述べている。そして、教員の音声指導に対して消極的な実態が窺えたことを報告している。また、『英語教育』³⁾が行った調査では、自身の発音について多数の教員が「課題だと思われる力」として挙げている。また、設問2では7割以上の学生がALTの指導を受けたと答えているが、設問3で、その中の僅か22%しかALTによる発音指導は受けていない。更に、このような状況の中で、設問4では英語の発音に自信がないと答えた学生は8割近くにのぼり、設問5においては発音指導を受けたいと思う学生は94%にもものぼる。

・考察

既に述べたように、英語と日本語の音声規則の相違は大きく、また母音や子音の単音に関する知識に加え、アクセント、イントネーション、連音、同化、脱落などの超文節音素の学習も不可欠であるが、残念なことに中高6年の英語授業の中で、多数の学生はそれらの学習の機会がなく大学に入

学している。

従来から日本で発音指導として使われている方法は、発音記号を体系的に説明せず、CDなどで音声のモデルを聴かせ、その後リピーター発音させる方法であるが、本来の発音指導と呼ばれるものはその中には何もないと有本（2005）は指摘する。学習者は、録音した自分の音声とモデル音声を聴いて、違いをたとえ認識できても、どうやって直せばよいのか分からない。発音指導においては教員が調音法をわかり易く説明するだけでなく、学生の発音を実際に「聴いて評価し」、矯正のための「指導助言を与える」役割が非常に重要である。（有本、2001）

また、指導は継続して行くことが肝要である。太田（2012）は、中学一年生を担当した際、4月～6月までの3ヶ月間に徹底した音声指導を行った結果、英語学習の初期段階で十分な指導を受けて体得した発音や音韻感覚はその後の継続的な英語学習を通じて強化され、磨かれ、失われる事はなかったと述べている。このように一旦習得した発音は、学習を継続する上で更に強化され、更には洗練されていく。このように英語教育の特に初期段階に携わる指導者には、音声に関する正しい知識や感覚を学習者に身につけさせる重要な役割が課せられているのであるが、残念ながらその責務が果たされているとは言い難い。

・今後の課題

英語は今や「世界の共通語（Lingua Franca）」あるいは、「English as an International Language (EIL)」として、多様な英語が世界には存在し、単一の「正しい英語」といえるものは存在しない。しかし、話者同士の意思の疎通ができないほどの、英語の音声規則を無視した独りよがりの英語になってしまったのは、コミュニケーションのツールとしての役割を果たせなくなる可能性が高いのも事実である。「英語は国際語であり、国際的に通用する英語を発音する事が必要である」と見上（2011）

は述べているが、英語教育において重要なことは、日本語と英語の音声特徴の相違や、英語の音韻規則をしっかり英語教育の中で教育し、矯正を重ね、これらの音声規則の知識を身につけることではないだろうか。それによって相手にわかりやすい英語でコミュニケーションを取ることができる。特に発音に関しては、臨界期（critical periods）以降の習得が、それ以前と比べると困難になるというデータが多数報告されていることなどから、文部科学省は臨界期前の小学校における「外国語活動」の導入に踏み切ったと思われるが、適切な指導を行うことのできる指導者が不在では、望ましい結果を生むことは難しい。特に、週に僅か1コマという短い時間の中での習得は現実的ではない。

国際語としての英語コミュニケーションが重視される今日、教員が音声に関する基礎的な知識と指導技術を持つ事は一層重要になってきており、そのための教員養成指導、研修制度などの対策が早急に求められる。また、ALTについても発音の指導を併せて行える人材を積極的に求めてゆく努力が必要であると考えられる。

注

- 1) 平成24年度 小学校外国語活動に関する中学校教員意識調査（平成24年）（文部科学省）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/shiryo/_icsFiles/afieldfile/
- 2) 牧野武彦（2005）『日本人のための英語音声学レッスン』大修館
- 3) 谷口友隆、西垣知佳子、村越亮治、渡辺麻美子（2014）「鍛えるべき英語力と、その鍛えかたとは [座談会] アンケートからみえてくるもの」『英語教育』63(8), 6-11.

参考文献

- 有本 純（2005）「発音指導における教師の役割 怪しい発音指導の正体」『英語教育』54(10).
- Burnes,A.(2006)Integrating Research and Professional Development on Pronunciation Teaching in a National Adult ESL Program. *TESL Reporter*, 39(2), 34-41.

Foote,J.A,Holtby. A.K., & Derwing, T.M.(2011)Survey of the Teaching of Pronunciation in Adult ESL Programs in Canada, 2010. *TESL Canada Journal*, 29(1),1 -22.

見上 晃、西堀ゆり、野中美知子（2011）『英語教育におけるメディア利用—CALLからNBLTまで』英語教育大系第12巻、大修館

田中英理、山西博之（2011）「英語音声学・音韻論的特徴の習得を目指した授業の効果検証」、*JALT Journal*, 33(1), 49-66.

手島 良（2011）「日本の中学・高等学校における英語の音声教育について—発音指導の現状と課題」『音声研究』第15号第1号、31-43.

上田洋子・大塚朝美（2011）「発音と音声のしくみに焦点をあてた中学英語教科書分析—インプットの基礎を考察する」『大阪女学院大学紀要』（7）、15-32.

太田かおり（2012）「日本の英語科教育における音声指導の現状—初期英語教育における音声指導の導入及び教授法の確立を目指して」『社会文化研究所紀要』69号、53-77.

Koike,Y.(2014)Explicit Pronunciation Instruction : Teaching Supersegmental to Japanese Learners of English. *JALT 2013 Conference Proceedings*, 361-369.

谷口友隆、他（2014）「英語教師が鍛えるべき英語力」『英語教育』63(8)、6-12.

（ちえんばれん・あきこ 聖学院大学基礎総合教育部特任講師）